

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和2年度（2020年度）発生予報第9号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和2年度（2020年度）病害虫発生予報第9号（12月予報）

I 気象予報：令和2年（2020年）11月26日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	30	40	30
	降水量	40	40	20
	日照時間	20	30	50

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	灰色かび病	並	やや少	並(±)	並(±)	降水並～少 (-)	
	葉かび病	やや少	並	並(±)	並～やや少 (-)	降水並～少 (-)	
	すすかび病	並	やや少	やや少(-)	並(±)	降水並～少 (-)	
冬春 ナス	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少 (-)	
	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少 (-)	
冬春 キュウリ	うどんこ病	やや少	並	やや少(-)	並(±)	降水並～少 (-)	



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
イチゴ	うどんこ病	やや少	並	やや少(-)	並(±)	降水並～少(-)	
	ハダニ類	やや多	多	やや多(+)	やや多～並(+)	気温並(±)	
レタス	菌核病	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少(-)	
冬春果菜類	コナジラミ類	やや多	並	キュウリやや多 ナスやや多～やや少 トマト並 ナスやや少(±) イチゴ並(±)	キュウリやや多 ナスやや多～やや少 トマト並～やや少 イチゴ並(±)	気温並(±)	野外コナジラミ類 黄色粘着板調査 八代市やや多(+)
	アザミウマ類	並	並	イチゴ並 ナス,キュウリ やや少(-)	イチゴ,キュウリ並 ナス並～やや少(-)	気温並(±)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎冬春トマト

1) 灰色かび病

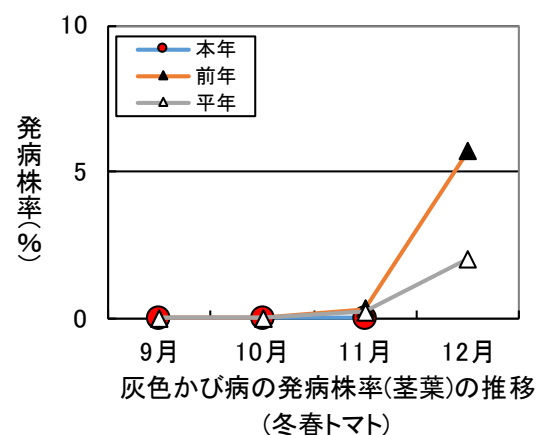
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、茎葉・果実とも発生を認めず（発病株率、茎葉平年0.2%果実平年0.0%）平年並であった(±)。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

イ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

2) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

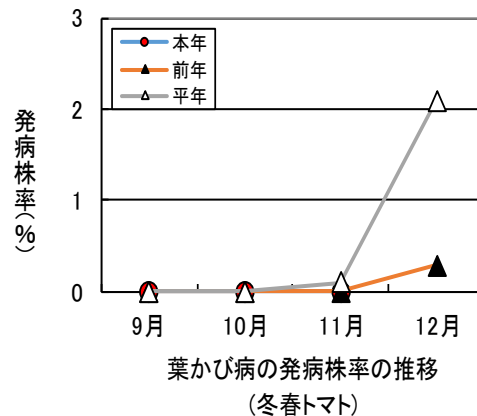
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生を認めず(発病株率平年0.1%)で、平年並であった(±)。

(3) 対策 ア 抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) すすかび病

(1) 発生量：並

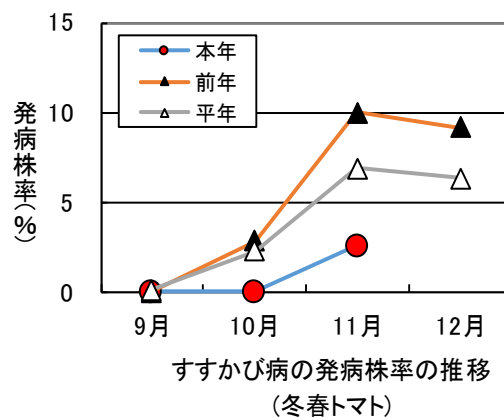
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病株率2.6% (平年6.9%)で、平年比やや少の発生であった(-)。

(3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

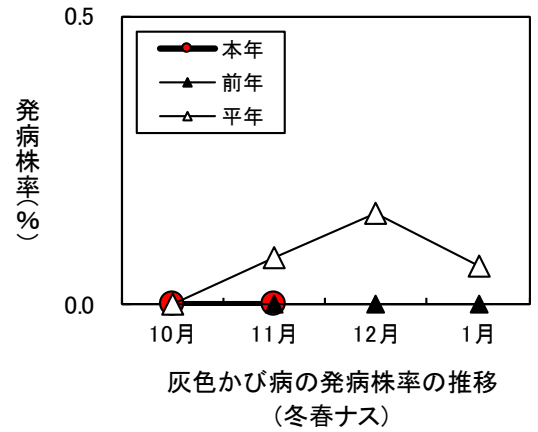
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春ナス

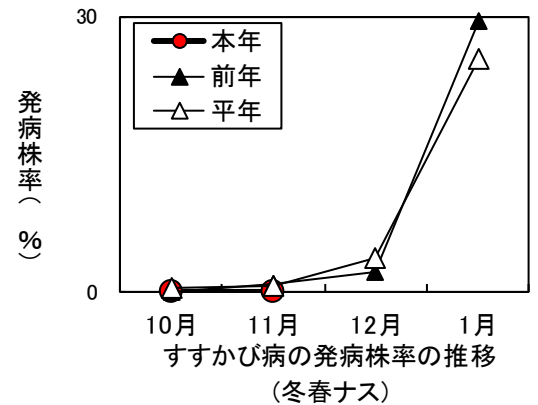
1) 灰色かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生は認めず（発病株率平年0.1%）、平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
イ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) すずかび病

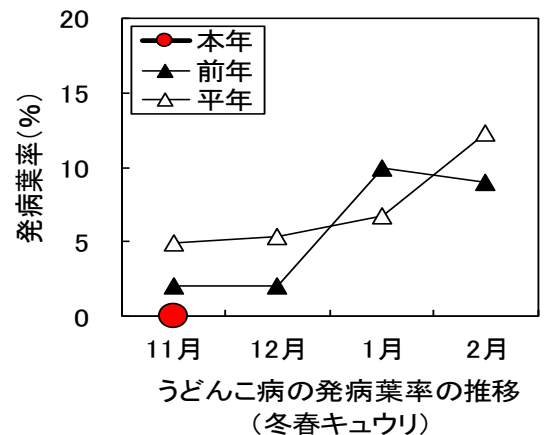
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生は認めず（発病株率平年0.6%）平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、分量の薬液を丁寧にかける。
イ 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎キュウリ

1) うどんこ病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病葉は確認されず（発病葉率平年4.9%）、平年比やや少の発生であった（-）。
- (3) 対策 ア 多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。
イ 発病葉や不要な下葉など取り除き、ほ場外で処分する。
ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ

1) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

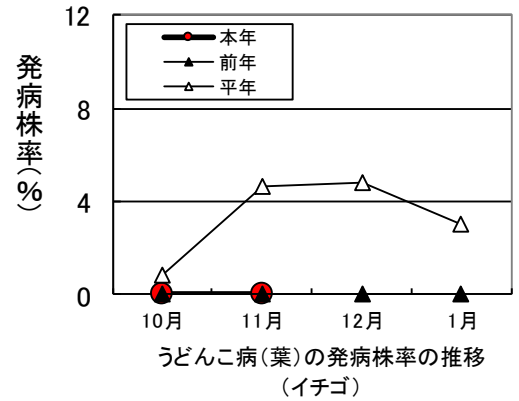
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、葉で発生を認めず（発病株率平年4.7%）平年比やや少であった（－）。

(3) 対策 ア 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

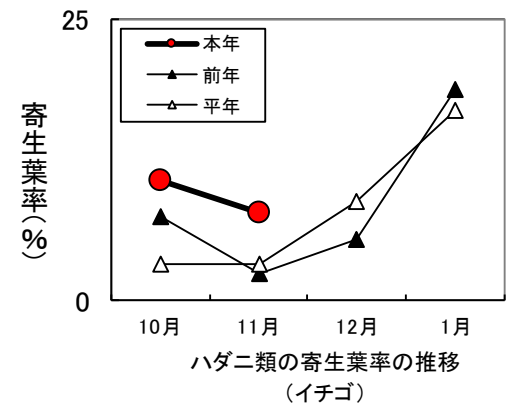
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、一部多発ほ場が見られ寄生葉率7.7%（平年3.1%）で平年比やや多であった（＋）。

(3) 対策 ア 寄生葉や下葉かぎした老化葉は通路に放置せず、ポリ袋に詰めるなどしてほ場外に持ち出し適切に処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎レタス

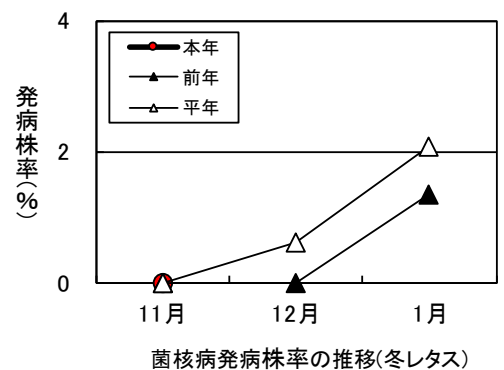
1) 菌核病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生を認めず（発病株率平年0.0%）、平年並であった。

(3) 対策 ア 予防が基本となるため、被覆前に薬剤散布を行う。

イ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。



◎冬春果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、キュウリで寄生葉率5.7%（平年4.0%）で平年比やや多、トマトで寄生葉率1.4%（平年0.9%）で平年並、ナスで寄生葉率16.4%（平年21.1%）で平年比やや少の発生であった（±）。

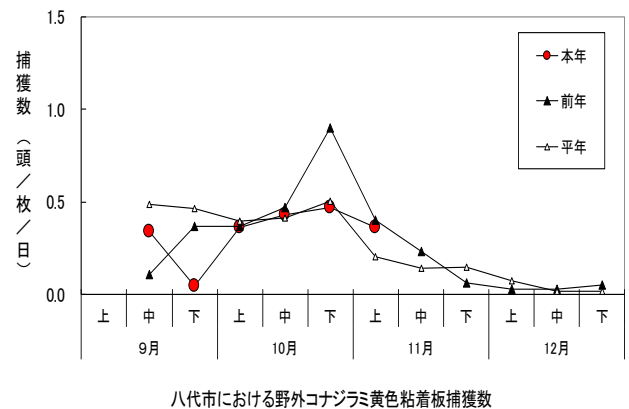
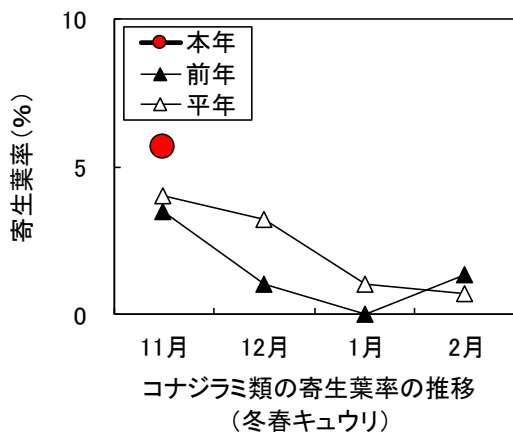
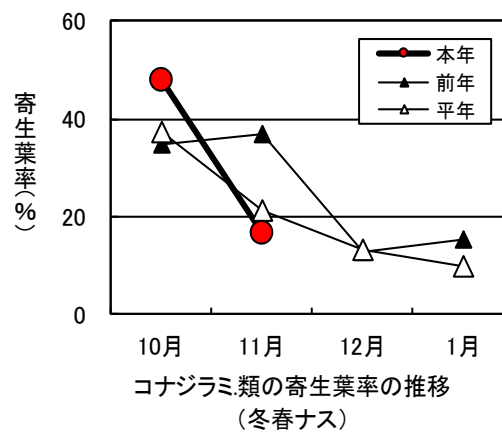
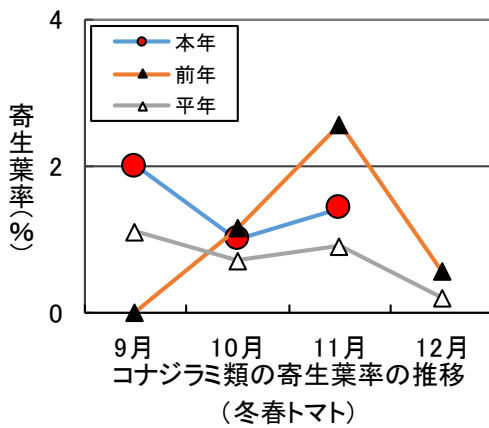
イ 11月上旬の10日間、八代市屋外に設置した黄色粘着板の1日1枚当たりのコナジラミ類捕獲数は0.4頭（平年0.2頭）で平年比やや多であった（+）。

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

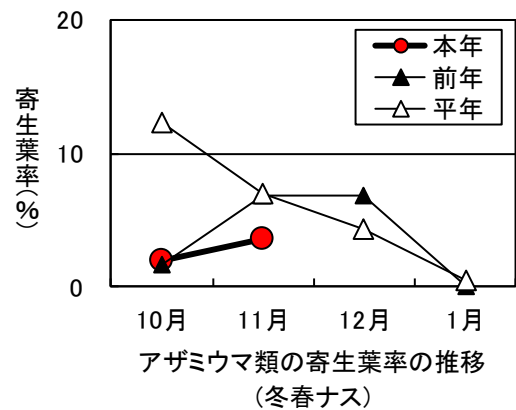
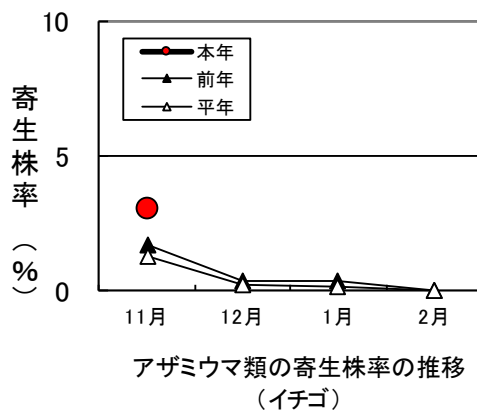
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、イチゴで寄生株率3.0%（平年1.3%）で平年並、ナスで寄生葉率3.6%（平年7.0%）、キュウリで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.9%）平年比やや少の発生であった（一）。

(3) 対策 ア 12月以降も、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（**3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」**を参照）。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>

3 防除のポイント等

冬季における多湿、寡日照下での病害対策

【技術内容】

- (1) 暖房機や循環扇で空気を循環させ、ハウス内の温度むら、湿度むらをなくす。
- (2) 地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行う。
- (3) 外張（天井）等の結露水は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
- (4) 整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
- (5) 厳冬期（低温、寡日照期）は少量・多回数かん水を心がける（根傷み防止）。
- (6) 液肥を利用した施肥管理を行う（草勢維持）。

【留意事項】

- (1) 最低夜温の確保等、温度管理に注意しながら換気を行う。
- (2) 多湿、寡日照条件下では病害が発生しやすく、収量・品質の低下につながるので、病害の早期発見と適期（予防）防除を心がける。
- (3) 病害葉及び病害果等は早期に除去しハウス外に持ち出して適正に処分する。

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、野外の微小害虫の数は大きく減少し、野外からの侵入はほぼ無くなります。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動しますので、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。また、地域におけるウイルスの伝染環（つながり）を断ち切るために、冬期においても施設外にウイルスを拡散させないようにする必要があります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。
- (2) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。
- (3) 発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。

II. 保毒虫を施設外に「出さない」対策

周辺施設の作物や野外雑草にウイルスを定着させないために、栽培が終了した施設から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- (1) 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、必ず施設を密閉して植物を枯らす。
- (2) 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。密閉処理の期間はタバココナジラミは植物が枯れて1週間以上、アザミウマ類は地温15℃以上では2週間以上を目安とする。

III 【その他の病害虫】



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
カンキツ	ミカンハダニ	並	防除員報告では平年並～やや少(－)。 貯蔵するカンキツ類では、貯蔵中の被害を防ぐため、収穫期間近にはほ場で発生が確認された場合には、薬剤防除を行う。
	緑かび病 (貯蔵病害)	並	防除員報告では平年並～やや少(－)。 収穫時には、果実表面に傷が付かないよう注意し、収穫当日は選果をしない。また、入庫前は必ず予措を行う。
冬春 トマト	疫病	並	巡回調査では、発生を認めず平年並(±)。 発病果、発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
冬春ナス	うどんこ病	やや少	巡回調査は、発生を認めず平年比やや少(－)。 発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
レタス	細菌性病害 (斑点細菌病、軟腐病、腐敗病)	並	巡回調査では、斑点細菌病、軟腐病、腐敗病はいずれも発生を認めず(平年発病株率0.0%)、平年並であった(±)。 予防が基本となるため、被覆前に薬剤散布を行う。
【野菜病虫害の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期に発見し初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(生産環境研究所病虫害研究室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」